

# 中国における日本製アニメーションの展望

## —今敏研究の動向を事例として—

CAI Yuqin

本研究の目的は、中国における今敏研究の動向の事例として、日本および英語圏、中国における今敏研究との相違点を考察し、今後の中国におけるアニメ研究の展望を見据えることである。

1980 年代以降、日本製アニメは中国で放送が始まり人気となっている。豊かな題材や先進的な制作水準を持つ日本製アニメは、中国のアニメ業界にとって参考になるものであり、中国におけるアニメ研究も日本製アニメに注目している。現在、中国における日本製アニメ研究に対する考察は概ね宮崎駿や大友克洋、押井守、今敏など作家性の強い監督の作品に基づいて行われている。その中でも今敏の作品は「本格的な成人向けアニメ」と評価され、2010 年代に入って日本製アニメ研究の事例としても注目されている。

今敏作品は日本国外で評価が高いほか、今敏に関する研究も日本国外のほうが盛んである。そこで、日本に限らず、英語圏および中国における今敏研究の経緯を把握し、日本における今敏研究に国際的な視点を入れることには意義があると考え。その上で、日本、英語圏、中国における今敏研究を整理し、中国における今敏研究の広がりを中心として、理論の背景に基づいて各国の研究の相違点を考察し、今後の中国におけるアニメ研究の展望や課題を示すことにも意義があると考え。

この論文の構成は、以下のとおりになっている。

序章では研究動機として、日本製アニメの国際的な受容、中国のアニメ産業およびアニメ研究の発展を述べた。

第 1 章では研究背景として、中国における日本製アニメの受容を指摘し、Douban.com の掲示板に掲載されている今敏作品に対する評価を概観した。また、中国におけるアニメ研究および今敏研究の概観を示した。そして、先行研究として徳江剛の「英語圏における日本のアニメーション

ンの研究動向;今敏」を参考し、日本、英語圏、中国における今敏研究を要約し、各相違点を考察することを本研究の目的として設定した。

第 2 章では、日本および英語圏における今敏研究の要点を整理し、それぞれの相違点を比較した上で、テキスト分析が中心であることを明らかにした。

第 3 章では、中国における日本製アニメ研究の事例として、今敏に関する書籍および CNKI のデータベースに収録されている学術論文の内容について考察した。CNKI の論文の論点をまとめ、中国における今敏研究は作品のテキスト分析だけでなく、制作技術(音声、色彩、キャラクターデザイン、映像編集)に関する研究も充実していることが明らかになった。

第 4 章では結論として、2, 3 章の考察を踏まえて今敏研究の相違点を考察した。第一に、日本、英語圏と中国における今敏研究はいずれも、アニメ研究では一般的な作家論や作品論だけではなく、文化表象論、制作技術、フェミニズムなどの視点もあることが分かった。第二に、文化表象論の視点から英語圏と中国ではいずれも、今敏作品に含まれている「憂鬱な気持ち」に着目していることを考察した。そして、「オタク」に対する理解の仕方に基づき、中国における今敏研究が「オタク」についての分析に注目していないことを考察した。第三に、中国のアニメ産業の発展およびアニメの人材育成の現状にともなって、中国における今敏研究は制作技術にこだわっていることを指摘し、中国におけるアニメ学科の問題点を考察した。第四に、精神分析学に基づく今敏研究のテキスト分析は中国で発展していることを明らかにした。第 5 に、フェミニズムに基づく議論は中国に乏しいことが、今後の中国におけるアニメ研究の課題であることを指摘した。